

あなたはどうか考えになりますか

ヨハネによる福音書 8: 1-11

賈 晶淳

「姦通の女」と小見出しが付いているこの箇所はヨハネによる福音書だけに載っているものですが、キリスト教だけでなく、一般の人々にも多く知らされている内容ではないかと思えます。とても美しい内容ですが、共に最も厳しい内容だと思えます。

この箇所の前後には何故か特別な括弧が付いています。それがあらわすのは後の時期に追加されたというしるしです。元々この場所にはなかった内容であったということです。いつこのようなことが行われたのかはさて置きまして、要するにこのような内容を聖書に載せるか、載せないかという教会内部での葛藤と対立の後に載せられたという話です。その理由とは時代が経ても変わらないことですが、こういう場合赦したくない気持ち、赦してしまうと社会的秩序が壊れてしまう等の考え方です。

にもかかわらず重要なのは何故かこの文章が最終的にこの場所に載せられたということです。どうしたのでしょうか。一つ確実なのは、イエスの短かった生涯における教え、或いは活動と一貫する内容であったということでしょう。そして、ヨハネによる福音書での位置づけはイエスの最も重要な時期に当てられたことです。私見としては受難週における最高の傑作ではないかと思っています。

この部分を選びましたのは、昨今、小泉政権によって無謀にも思われる、日本国憲法始めとする一連の法改正のための行動を見ながら行動を見ながら、考えさせる部分がありましたので選びました。この聖書の内容は一言でいいますと、罪びとを赦すか赦すまいかの問題ではありません。イエスという人物を、そしてイエスという世論をつぶそうとする既得権者との戦いの部分として考えられるからです。

イエスが過越し祭りの時を間近に向かえ、エルサレムに行きまして毎日のように神殿に通いました。そのある日のことです。人々がイエスの教えを聞こうとしてイエスの周りに集まりました。人々がいろいろ話を聞いていたところ、当時の体制側の指導層にあたる律法学者やファリサイ派の者らが一人の女性を、人々の輪の中に連れ込んできました。そして、彼らは人々の前でイエスに尋ねます。**この女は姦淫の現場で捕まった。律法にはこの場合この女を石打にして殺すように書いている。あなたはどうか考えているのか。**(4節)

言い換えますと、彼らは人の商売に乱入して妨害をしているのです。要はこの女性をどうするかの問題ではありません。イエスとイエスという世論を押しつぶし、同時に自分たちの正しさをアピールしようとした出来事です。そういった意味ではこの女性も既得権者のための犠牲者の一人であったのではないのでしょうか。もしこのテーマでロールプレイをすることになったら、皆さんは誰の役を演じたいのでしょうか。イエスですか。この女性でしょうか。律法学者でしょうか。もう一つ重要な役が残っています。判断力を失い揺れ動いている人々の一人です。

幸いなのかこの女性はイエスによってその運命が定められるようになっていきます。しかし、この女性の運命はイエスがどのような立場をとっても死ななければならないものです。彼らが考えている律法によってです。イエスとしては二つの立場を取ることが考えられます。一つは、イエスがこの女性を皆と一緒に石を投げ撃ち殺すことです。そうしますと自分は生き残ります。もう一つは、自分はこの女性の罪を赦すといって、皆の前で律法を違反することです。女性を連れてきた人たちは後者を狙っていました。しかし、この出来事の場面は想像もしなかった方向へ展開して行きました。それは、皆を既得権者のイデオロギーから解放してあげたのです。その意味でこの話の焦点は女性でもなく、民衆でもなく、イエスでもなく、イエスを殺しようとしていた人々ではないかと思えます。

話が少しずれますが、この場面で連想するには、全体主義国家で行なっていた公開処刑です。当事者への弁明の機会も与えず、弁論もありません。言い換えますとこれは一種の律法をイデオロギーとした全体主義であります。裁判もありません。この主催者たちは世論だけを煽って人を殺しながら自らの正義感を味わっているのです。それによって自分が誰より正しい人間、義人であるのを見せ

かけているのです。他人を犠牲にして得た自慰です。一種のマゾヒストです。彼女を連れてきた人間たちは一人もれなく、自らが女とは絶対違う部流の人間だと思っていたでしょう。彼女を殺しことによって自分の宗教的な正しさが認められるのです。勿論、聖書のこの部分の内容は彼女の行為の事実を前提しながら話を進めています。しかし、この場面を良く読めば分かりますが、そこに集まっていた人全員が姦通の現場を見たわけではありません。誰か一人が現場を目撃したか、或いはその人も人から聞いた話かも知れません。見てもいない事実の正しさをイエスにも押し付けます。自分たちに同意せよと責めているのです。これが全体主義の世論操作です。このようなことは戦時中の日本で、ナチズムの独逸で、独裁政権下の韓国でもありました。この現場ではイエスもそのイデオロギーに同調しなければなりません。ある意味で、昨今の小泉と自民党政権が共謀罪、教育基本法、日本国憲法の改憲を強制しようとする背後にある現実ではないかと思えます。ありもしない、戦争やテロやあらゆる有事を持ち出して同調せよと世論を使って煽り立てているのです。

多くの人々は新聞記事を鵜呑みにして、確認もしていないのに自らがその証言者として働きます。自主的な判断能力の欠如です。このような社会は不安定になります。その過程で少数意見は踏み潰されます。市民一人一人に不安感を与えます。人が人を信用しなくなります。それが体制側の狙いです。改憲主義者らもいつかその現実自分が立たされると思えます。このような時に重要なのは他人がどう判断するかの問題ではなく、自分がどう判断するのかという決断が必要になります。「あなたはどうか考えているのか」と既得権者らのイエスへの問責に対してイエスが見せた仕草は、この問いを彼ら自身に戻させました。六節と八節に執拗に問い続ける彼らの前でイエスはかがみ込み、指で地面に何かを書き始め、又書き続けられたと書かれています。それはその現場に立ち会っている一人一人に「あなたはこのことをどう考えているのか」という反問ではないでしょうか。

このような沈黙を通して、イエスは不純な理由で大衆心理を煽る者たちの虚構を暴露し、それに惑わされた一人一人を扇動者から解放させ、我に戻したのではないかと思います。同時に既得権者らにも自ら建てたイデオロギーをもう一度考え直すように時間をあげているのではないかと思います。もしこの場でこの女性を殺した場合、世の中は秩序が守られ、綺麗になるかも知れませんが、人々の間には深い不信の溝が広がります。私たちの時代に経験したナチスのような全体主義とは一度走り出すと壊されるまで止まりません。老少を問わず六百万人の無辜なユダヤ人を殺し、千万を超える人々を戦争の犠牲者にさせました。イエスのこの無駄に見える行為の一寸は、人々をそのドン底に落ちるところから救ったのでしょうか。驚きますのは現場にいた一人一人が皆我に戻ったということです。

9節を見ますと、「年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとり、真ん中にいた女が残った。」と書いています。成り行きから考えますとこの二人は何をも言わなくても互いを認識しています。彼女は逃げて隠れていません。イエスは彼女にいいからあなたもさっさと帰りなさいと言っているわけでもありません。このことを忘れてしまえというのでもありません。ここにも存在する沈黙は、最後にこの問いを彼女からイエスへ向かわせたのではないかと考えさせます。「イエス、あなたはどうか考えているのでしょうか？」

二人は向かいあっています。じっと相手の顔と目を見ていたのでしょうか。そこには抑圧的な世論が入る余地はありません。人が何を言ったって構いません。私とあなたの問題です。聖書には一言書かれています。本当はなくても分かります。彼女は命を助けられた喜びより、心の底から新しい生への意志が湧いて来るのを感じたでしょう。そして、彼女は新しい人生を始めたでしょう。しかし、残念なことにこの小さい出来事の直後、執拗な既得権者らの石はイエスに向けられました。

(第168号・2006.4.30.証詞より)

付記。5月30日-31日に富士見町教会で行われた東京教区総会で、Nという人が公の発言の中である方を「赦さないぞ!」といいながら石を投げているのを見て、私自身大変傷ついてしまいました。議案『日本国憲法第九条の改憲に反対する決議』に関する件は、N氏の反対への御導きとご扇動によって否決されてしまいました。昨今の東京教区の状況を含め、とても残念と思いました。